

令和6年 能登半島地震 震災後の現状と これから①

迅速に始動した 「オールこども石川」 の活動



全私保連広報部
岩渕善道

はじめに

2024年の元旦、石川県能登地方を震源とした令和6年能登半島地震が発生しました。この災害に対して、全国の保育者が思いを寄せ、今も能登の子どもたちに支援が行われています。5月1日には、(一社)岐阜県民間保育園・認定こども園連盟より能登への慰問が行われ、寄付金が贈呈されました。全私保連広報部はこの旅程に同行させていただき、慰問先の保育者の方々にお聞きしたお話を3回連載でお届けします。

第1回は、「オールこども石川」事務局長の新保雄希氏へのインタビューです。「オールこども石川」とは、石川県にある保育関係4団体(石川県社会福祉協議会、日本保育協会石川県支部、石川県認定こども園協会、石川県私立保育連盟)が協働し、被災した保育施設および被災地の子どもとその保護者の支援を目的とした組織です。

「オールこども石川」設立の経緯

震災後の混乱の中にあつて、1月10日に設立されたことにまず驚きました。迅速に物資が届いたこともそうですし、寄せられた募金も、このスピード感で動いたことが大きかったのではないかと思います。

す。団体の設立の経緯を教えてくださいませんか？

新保 ●石川県内には幾つかの保育団体がありますが、災害の前は、各団体がそれぞれの目的、趣旨に沿って活動していました。それが、僕も生まれて初めて経験した大きな揺れで、さらに多くの被害が保育や子どもたちに出るだろうと考えた時に、各団体が独自に動いてしまうと、どうしても力が分散してしまうのではないかと、いうのが一つ。

もう一つは、震災当日から、全国の方からお見舞いや安否確認の連絡をもらい、「何か必要なものはないですか」「お手伝いに行きます」という申し出をたくさんいただきました。徐々に能登の方が災害が深刻という現状が見えてきた中で、全国とのつながりは金沢市に集中してしまう、でも被害の大きいエリアに全国の思いをつなげるには、団体に縛られると非常に動きにくいと思ったことです。

そこで、子ども関連全般の団体の壁を越えて動くのはどうかということを、1月1日、2日に主要な団体の皆さんにお声かけさせていただきました。早速、皆さんに快くご理解いただき、進みましようということになりました。

各団体のコンセンサスや、受付をどこにするか、どこに口座を開設するかなど、最低限の仕組みづくりに10日までかかってしまいました。が、「オールこども」というスタイルで震災対応をしていくというのが最初の動きでした。

——他団体のコンセンサスを取るのはスムーズでしたか？「苦労はありましたか？」

新保 ●石川県の保育団体の関係性にはいろいろあったようですが、僕はそこにはあまり関わらないようにしています。最終的に「オールこども」で動けるなら、どんなことになっても構わないというので、そこは各団体の役員に託し、この体制でいこうとなりました。まったく波が立たなかったわけではないでしょうが、団体同士でいろいろ思うところがありながら、「オールこども」でやろうと動いていたただけかなと。

——結果として、早くから活動ができましたよね。複数団体が協調するにあたって工夫された点はありますか？

新保 ●団体のしがらみや手続きがあると足かせになるので、できるだけそこが滑らかになるように工夫もしましたが、石川はもともと、みんな仲がいいんです。団体とか保育界が、まあまあ顔が見える仲間内、能登の園の先生の顔が浮かぶ距離感で、ちょうどいいんです。施設数や距離的にも。なので、比較的石川の場合はやりやすかったのではないかと思います。いい先輩方が多く、若い頃に団体間で苦労されて、代が替わり若い人たちがそうしたいなら、応援するからと言ってくれる先輩方が揃っていたということもあります。

——その若い方たちの活躍がすごく光っていましたね。

新保 ●はい、ほとんど青年部世代の人たちが動いているので、体と時間が必要なところは、そういう方に協力を仰いで、連絡体制などももう少し広い視野が必要なところは親会の皆さんにも手伝ってもらい、本当に「オールこども石川」の名のとおり、団体も立場も関係なく動ける人が動くといったイメージでした。

当時の活動について

1 被災地支援金

1月10日が「オールこども石川」として最初にアナウンスをした日で、形式的な設立の日になるのかなとは思います。じつは1月5日に、弾丸で七尾市、穴水町に伺い、これは本当にやらないとダメだと思ったきつかけになりました。最初はみんなに呼びかけて行こうとしたのですが、その当時はインフラの話があって「あまり来ないでください」という状況だったので、3人が車2台に物資を積んで伺いました。3園を回りましたが、どこもインフラが壊滅していて、被害もありました。2園は避難所になっていて、この先の不安のことを話されたので、早く動きたいとあらためて思いました。

そこから本格的に活動が始まっていきまし
た。1月10日にアナウンスをして物資が徐々に
集まる状況になって、同時に支援金も少しずつ
始まり、物資支援は1月中旬～4月初旬にかけ

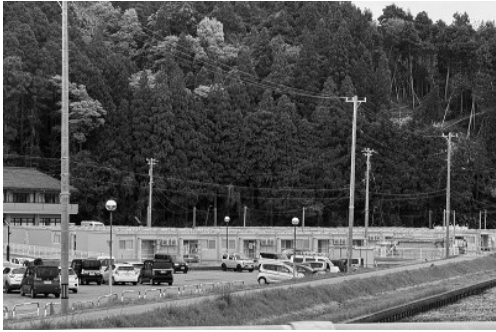


て合計9回行きました。最初は志賀町、続いて七尾市22園、その後に穴水町3園、輪島市5園、能登町3園、珠洲市1園という順番で。

まず1回目はローラー作戦ですが、休園状態の施設には行けなかったですが、何かしらの形で開園している施設については、状況確認も含めて全園ローラー作戦をしました。同時に、飲料水、ウェットティッシュ、携帯トイレなどの支援物資を持って回ることを行いました。そんな中で、やはり被害の激しい深刻な施設がいくつかあったので、そこは2回目、3回目の支援として追加で物資を持って行きました。

支援金は、第1期が1月31日までで、約3千数百万円。第2期が3月31日までで、約1億300万円。今は第3期がスタートしていて、今

穴水町の仮設住宅



年といった長い期間になりますが、4月26日現在の支援金は1億3342万4519円になっています。

配分は、対象としてまず被災した保育従事者の皆さんに配りました。人的被害と建物の被害の度合いを基準にして、傾斜配分で配らせていただきました。被災した園児への支援は、この震災をきっかけに被災エリアから県内に避難した方も、県外に避難した方も対象として、1人一律5万円で配らせていただき、第1次配分は、職員と子どもを合わせて3500万円ぐらいを配り終えました。

2 情報共有会議

イレギュラーな形ですが、情報共有会議を2月22日に七尾市で開催しました。発災から約50日ほど経過した時に、一番深刻な時期を過ぎた次に向かうようなフェーズのところで、被災地の園長先生が、がむしゃらにされていたの、ちよつと振り返る機会にもなるし、他の施設、

隣の施設、他のエリアがどうなっているかを知る機会にもなるということで、情報をみんなを持ち寄って開催しました。これも被災地の園長先生から提案があって、「他がどんななのとるのか、一回知れる機会があったらいいな」というつぶやきから、やってみましょうかと。それも、やはりいろんな思いがあるだろうから、WEBではなくて対面がいいと。

まだ水道も復旧していない、道路もまだまだという時でしたが、それでも集まることに意味があるというので七尾市で開催を強行しました。被災エリアから10人くらい、「オールこども石川」の中心メンバーが5人くらいで、対面は15人ほどでしたが、石川県、こども家庭庁からもオブザーバーで参加いただきました。

県からは特に、今の被災状況や県としての今後の見通しなどの話題提供がありました。被災地からは、2、3割くらいの子どもたちがどこかしらに避難していたので、本当に戻ってくるのか、職員もやはり避難されている方が多かったの、4月の新年度を本当に迎えられるかといった不安がすごく大きいと話されました。

園児が戻ってくるのは嬉しいけれど、それを見る職員がいるのか、反対に職員が戻ってくるのは嬉しいけれど、それを支えるための園児数確保ができるのかなどといった話でしたが、とにかく先の不安があるということを県に聞いてもらえたし、こども家庭庁にもリアルな声を聞

いていただきました。この会は後々、今取り組んでいる応援保育士というスキームの流れにつながっていく会になりました。

そういう意味で、情報共有の会議ができたのはよかったと思っています。

3 物資支援

物資支援で最大の問題だったのが倉庫でした。貸していただいたのは保育関連事業者の方で、全国で屋内遊技場のフランチャイズ展開など子ども関連の仕事をしている（もともとが物流や貿易がベースだった）会社です。

1月1日、2日に「オールこども石川」の地ならしをしている時に、物資支援を受けるのはいけれど、集める場所は無理だと思い、どこかそれを集約できる場所を知っている人はいないかと当たっていました。思い付いて、その社長さんに直接電話で「どこかに倉庫はないですか。トラックもどこか紹介してください。ご都合のいい時にお返事を……」と言った瞬間に、「うちを使ってください」と、快くご協力を言うていただきました。

同時に、「倉庫のスタッフが荷物の受け入れもリスト化も手伝います。援助しながらでは難しいでしょう」と言って協力してください、トラックも貸してくださいました。支援物資40トン中4分の1強は、その会社のトラックで配ることができ、本当に助かりました。

交通インフラがこんなに麻痺するということ

をまったく想定していなかったし、本当にもう案が浮かばないというか、みんな保育だけではなくて、どの業界もそうなので、車も人も、場所も取り合いというのがとても苦しかったです。そんな中でめどがついたので、制限なく、物資をぜひ送ってくださいと言えました。これはすごく大きかったかなと思います。

最終的には、イベント会社のトラックも無償提供してもらいました。そして車屋さんも逐次車両を無償提供してくださり、その車で回りました。最初はワンボックスカーや乗用車で回ったのですが、どうやってこの量を配り切るかみんなの心が折れかけたので、やはりトラック

を動かせたのは非常に大きかったです。

今後の活動について

ポジティブな部分とネガティブな部分とありますが、ポジティブな部分は、やはり細く長い活動を継続していきたいと思っていて、復興はかなりの時間を要するので、能登の5年先、10年先をイメージしながら、必要な支援を「オールこども石川」という形で続けていきたいと思っています。ただ、これも有機的であっていいと思いますが、4団体だけが絶対ではないでしょうし、4団体以外の方でもやりたい人が、特に保育や乳幼児に関して重なるのであれば、あ

らゆる可能性でつながって活動していきたいというのがあります。

特に柱としては、やはり支援金という、活動するためのベースとなるお金の枠組みは何かしら必要だろうと思っています。細く長いご支援をいただけるような仕組みづくりと、善意をくださった方に対する被災地の状況報告や活動報告、またはそういうつながりづくりなどをやっていくべきだろうと思います。

もう1つは、被災地が今ダブルショックというか、もともと人口減少が著しい地域で、今回の震災でさらに人が流れたような状態の中で、ただ単に保育を再開して、保育施設を復旧するだけで前を向けるのかといったら、一概にそ

うでもないところがあります。もちろん主役は能登の先生方で、この先の未来をどう描くかということはありません。しかし、能登の若者が保育に対してポジティブな思いを持つてほしいし、子どもたちも選択の自由はあっていいと思います。

能登で過ごしたい、暮らしたい、能登が好きと言う子どもたちの思いをちゃんと支えられる保育の体制を、どうやってつくっていったらいいのかというのは、決して能登だけの課題ではなくて、「オールこども石川」で考えていくべきだと思っています。

ネガティブな部分は、やはりこの4団体がこの形で長く活動するというのは非常に難しいというか苦しいというか、人も替わるし、それぞれの団体の思いとか立場があるので。この3か月ぐらいは火事場のような状況で、被災地のためにと言えはいろいろ通るものもありました。しかし、今後はとても慎重になっていくだろうし、そうなるべく同時にこの組織のあり方も、皆さんが納得できる状況は非常に難しいかなと思っています、今その体制をもう一度再確認したり、再構築したりする時期なのではないかと感じています。

だから、この先「オールこども石川」として、どういう組織体制で進めていくのが望ましいのか、もう一回見直すタイミングにあるということをお伝えしておきます。

全国の保育者へのメッセージ

最後に、全国の保育者へメッセージをいただければと思います。

新保 ●この度は、能登半島地震に対して、特に全国の保育者の皆様から多くのお気持ちを頂戴しました。それが本当に僕らの支援活動でも励みになりましたし、それ以上に、皆様からお預かりしたもののや気持ちを被災地に届けるたびに、元氣を取り戻したり、涙されたり、満面の笑顔で返してくださったりという場面にたくさん出会いました。

支援活動をやっていることは、保育の世界は会ったこともなく、顔も知らないけれど、同じ保育に携わっているというだけで無言の仲間意識というか、共通の思いが生まれて、やはり人事ではなくなる。それが本当に一番感じたところでした。これまでの支援のお気持ちに感謝すると同時に、これからも決して悲観的なイメージではなくて、これから元氣になっていく能登を明るく応援していただきたいですし、もし願いが叶うなら、元氣になった能登へ訪れていただいて、最高の能登の自然の恵みと人の温かさに触れていただきたいなと思います。またそういう機会もつくっていききたいと思いますので、ぜひ引き続き

第1回 / 全私保連青年会議・日保協青年部 合同研修会 「はじまりは石川から～がんばろう能登～」



2024年元旦、石川県能登地方を襲った大地震。多くの命が奪われ、今もなお避難生活に苦しむ方々がいまいます。心からお見舞い申し上げますとともに、1日も早い復興を願います。今、自分に出来ることなんて、些細なことかもしれない。でも、「自分たち」なら、もう少し大きな助けになれるかもしれない。日本保育協会青年部と全国私立保育連青年会議。団体は違いますが、目指すところは限りなく近い我々の、初めての合同研修会を石川県金沢市で開催します。今回は、この研修会を復興支援チャリティ活動の一つとし、収益は全て「オールこども石川」へ寄付いたします。皆様の参加を、心よりお待ちしております。

講師紹介

株式会社保育システム研究所 代表
吉田 正幸 氏
講演2
接客向上委員会 & Peace 代表
石坂 秀己 氏

2024年
7月29日 月
13:00 ~ 16:30
@金沢市アートホール
金沢市本町2丁目15番1号

参加費 10,000円
定員 (研修 300名・復興交歓会 100名)
18:30より情報交換会を開催いたします。
※別途参加費 8,000円
青年会員に限りずどなたでもご参加頂けます



お申込みはこちらから

主催：公益社団法人 全国私立保育連青年会議・社会福祉法人 日本保育協会青年部
問い合わせ先：全国私立保育連事務局 03-3863-3880 ans@zenshihoren.or.jp (担当：青木)
日本保育協会青年部事務局 077-579-3244 jung@hoshinoko.ed.jp (担当：中西)



新保雄希氏

きのご支援をよろしくお願いいたします。
—— 本日は貴重なお話をありがとうございました。
新保 ●ありがとうございます。

次回は、石川県穴水町の「平和こども園」のお話をお届けします。

令和6年 能登半島地震 震災後の現状と これから②

悲観的にならない 平和こども園の 避難所開設の活動



全私保連広報部
岩渕善道

金沢市から車を借りて90kmあまり北上すると、奥能登の玄関口として知られる穴水町があります。令和6年能登半島地震で大きな被害を受けた地区の一つでもある穴水町までの道路には復興支援のトラックが何台も走り、また道沿いには深いダメージを負った幹線道路を復旧するための多くの重機が並んでいました。

「NOTO, NOT ALONE（能登は、ひとりじゃない）」を合言葉に保育の分野を通じて復興を目指す、平和こども園園長・日吉輝幸先生にお話を伺いました。

被災時の状況

—— 本日はお忙しい中、貴重なお時間をいただき、ありがとうございます。まずは1月1日の状況などを教えていただけますでしょうか。

日吉 ● 発災時、私の地元は輪島市門前町の、約60戸ほどの小さな山あいの集落なんですが、その元旦祭で、氏神様の神社へ行きました。そこで宮司さんからおはらいを受けて、終わった後、皆で御神酒（おみき）を飲みながらわいわいやりました。それから家へ帰って、横になってテレビを見ていた時にグラグラって揺れて。それでテレビの地震速報を見ていたら、その後もっと強い揺れが長時間続きました。

やっと収まったら、部屋の中はぐちゃぐちゃでした。たんすの引き出しは飛び出している、

クローゼットから衣装ケースが飛んできていたり、ビデオラックも倒れて、もう床が見えない状態でした。とにかく外に出ようと思い、運転免許証と財布、ケータイと車の鍵、それだけを持って外に出ました。隣に仲よくしてくれている家があるので、行ってみたら屋根瓦も落ちているし、酷かった。みんなどうしているかなと言ったら、集会所に集まっているようだと言われました。

そこで近所の安否確認をしていると、向かい側の家に住んでいるおじさんが車で通りかかり、「家が潰れてしまった」と言って、本当に目がうつろになっていました。そうしているうちに、あたりはもう真っ暗になりました。

電気、水道は止まったまま。うちはオール電化なのでまったく暖は取れない。ケータイも使えないし、ラジオで情報を聞きながら、やっぱりすごい地震だったんだとわかりました。でも遅い時間でしたから、詳しい情報が入ってこない。とにかく妻（副園長）と、明日明るくなったら園を見に行こうと話しました。夜はもうどういう状況になっているかわからないし、危険だから行けませんでした。

2日の朝、明るくなってから状況を確認すると、道路が亀裂している箇所や、片側1車線に対向車線が1mぐらい隆起していたり、段差で通れないところがあったり。午前9時ぐらいだったと思いますが、段差に土のうが置いてあ

園は停電しているかと思っていたのですが、園舎内に入ってみると、電気がついて、Wi-Fiもつながっていたんです。ケータイはつながらないですけれどもね。そこから無事の連絡とかを発信しました。園はプロパンガスなので、点検したらガス漏れも大丈夫。エアコンも使えるし、妻に「自宅より、こっちの方がいいよな」と軽口を言うほどでした。

大きな葛藤からの避難所開設

それが園での生活の始まりだったんですか？

日吉 ● いいえ、自宅にいるよりはいいかなと
思っただけで、避難所を開設しようなんて思い
ませんでした。自分も被災者だし、開設をお願い
されたわけでもないし。とりあえず自宅に帰
ろうと、それで石油ストーブ用の灯油を買いに
行ったら、仲よくしているピアノの先生に出会
いました。「大変でしたね。頑張りましょうね」
などと話していると、その先生が「昨夜、私、
避難所でみんなにパンを配つたの」と、とて
も明るく爽やかに話すんですよ。

この時が、避難所開設を考え始めたスタートだったと思います。

「普段、私たち福祉職は」と言いながら、他の人たちはやっているのに黙っていていいのか、みたいな気持ち芽ばえたんだろうと思います。車を運転しながらもろろ考えました。

帰宅して、薪で火をおこし、昼食にカツ丼を食べたのですが、まったく味を感じませんでした。家に帰る前に地区の避難所（集会所）へ立ち寄ったことを思い出していました。

避難所になっていた施設も、屋根瓦は落ちて
いるし、電気もない暗い大広間にストーブが一
つあって、高齢の人たちが暖をとっていたり、
壁に寄りかかって座っていたりしていました。

一回りして「頑張りましょうね」と声をかけたのですが、誰も返事をしてくれない。昨日一緒にわいわい騒いだ人たちが、こんな短時間で、返事もしてくれないくらい変わってしまったのかと、カップ麺を食べる前から、ずっと葛藤がありました。自分の中で、これでいいのかと。

それからです。妻が言うには、ずっと黙っていて突然、「避難所をやる」と言い出したと。それからブレーカーをすべて下ろし、自宅に鍵をかけて、園に来たんです。

そして、町の保育課に行つて、担当者に「避難所をやるうと思うんだけど、どんな状況かわかる？」と聞いたたら、「園の隣の病院が避難者であふれている」と。「ああ、わかつた。じゃ



「あ手伝いして」と言ったら、担当者たちはすぐに私の車に乗ってきました。

自分の中でいろいろシミュレーションをして
いたので、2部屋をとにかく片づけて掃除をし
て、受け入れ準備が整ったのが大体午後の4時
ぐらいだったと思います。きつと一心不乱だっ
たので、時間の感覚がまったくわからなかった
のですね。

妻が電子ジャーでご飯を炊いて、50個くらいおにぎりを作っている間に、病院に行って1・2階と5階を駆け回り、「平和こども園です。避難所を準備しました。来てください」と声をかけ続けました。その結果、33人の人たちを受け入れることになりました。33人中、3分の1は知らない人でした。お正月に里帰りして被災



した人たちも多かったのですね。

避難所のルールづくりとは？

——避難所の運営で気を遣われたことは何でしたか。

日吉 ●とにかく感染症を出さないこと。1月2日に受け入れて、一番最初に話したのは衛生の話です。トイレの使い方を徹底してもらいました。数が少ない（500回分）ということも伝えました。ただし、トイレバックを何人も使うという話は聞いているけれど、それはやめま

しょうと。そして処理をしたら必ずアルコール消毒をお願いし、トイレにもアルコール消毒液を置きました。「トイレのゴミは気づいた人が外のストッカーに持って行ってください。その時は必ず使い捨ての手袋をしてください。終わったら捨てて、必ず消毒してください」。これを徹底しましたね。

——その点を、2日の時点で最優先課題としてよく掲げられましたよね。大事なことです、なかなか気がつかないのでは……。

日吉 ●だって、私たちは普段の保育で衛生管理をやっている、さらにコロナ禍では、より徹底してやってきたじゃないですか。だからそこは自然と伝えられたんでしょうね。

3日の朝、みんな起きた頃に2部屋を覗いて、「おはようございます。どうですか、寝れましたか」と話したら、「足を伸ばせました」と言ってくれました。「よかったですね。じゃあ、寒いかもしれないけど、窓を全開にしましょう」と言って、換気しました。

——なるほど、避難所でのルールづくりでの隠れた重要ポイントですね。私たちがルールづくりでイメージするのは、「おにぎりは1人1個です」などから始まる感じがしていました。

日吉 ●それもこちらで決めませんでした。50個出して、皆さんで分けて食べてください。話し合っ

んで話し合ってください、と。同様に、次の日に届いた食事

も話をして分けました。あとは、本当に不安なこと、心配なこと、何かしてほしいことなど、何かあったら、どんな些細なことでも私に言っ

てと伝えました。できることは何でもしますからねと、それも早い時点で言いましたね。いろいろな専門家が視察に来て話をしていると、避難所の営みは保育と同じだな、だから何の混乱もなくスムーズにやれているのだらうなと思いました。衛生管理、食事、先の見通せる日常生活と主体性を持てる生活、そして心配事のソーシャルワーク。保育そのもののものだということに、本当に気づかれました。

園の運営再開

——園を避難所として開放し、それから通常の保育再開に至ったのはいつですか。

日吉 ●1月23日、遅かったですね。職員がまず出勤できなかった。職員と1月2日以降に連絡を取っていて、連絡が取れた職員、取れない職員も何人かいましたが、4日に出勤できた人は2人でした。1人は避難所生活で、1人は納屋での生活。その2人と少しずついいから掃除をしていこうと、1日2時間くらい午前中だけ来てもらいました。暫くして、もう1人の職員が来てくれるようになりました。その職員も避

難所生活で、そこは酷かったです。穴水町の避難所は一番多いところで、300人くらい、トイレも少なく複数人で使わないといけないし、片づけないと……。そんな状態だったから無理をさせられないと思いました。

それから、町外からの通勤者が多く、輪島市在住の職員もいたり、すでに金沢市の娘さんの家に避難しているという職員もいて、職員が本当にいなかったです。

環境も、水はもちろん使えないし、トイレも使えないし、開園は無理だと思っていました。

ところが、保護者にも一応メールと電話では「当面休園します」と伝えてあったのですが、年長組の女の子がお母さんと一緒に「友だち

ますか」と訪ねて来たんです。それが、1月16日か17日ぐらいだったと思うんですね。「ごめんね、誰もいないんだ。でも、せっかく来たから遊んで行く？」と伝えると、2階のホールで遊んで帰りました。発災から2週間たって、子どもたちも友だちと遊びたいのかな、でも保育者2人ではちょっときついな、親子で来てもらおうかなと思いました。そこで、「親子の集い」（親子登園）のような形で保育を再開したのが1月23日でしたね。

私の園は、発災当初74人の園児がいたのですが、調査したら34人が町外に滞在していました。だったら残り全員来ても40人だろうから何とかなるかなと言っていたんです。結果、23日に来

たのが11組の親子でした（子ども17人）。

親子で部屋に入ってもらい、様子を見ていたら、保護者は「ほら、○○ちゃんがいるよ、遊んでらっしゃい」などと言うんですが、子ども同士は会って挨拶をして帰るみたいな感じでした。子ども同士はまったく遊んでなくて、11組の親子の遊びのグループが保育室の中でできていて「こりゃ駄目かな」と思いました。

少し落ち着いてきた頃に、「ちょっと子どもたち、いいかな、お母さんとお話があるから」と言っただけでも保育者だけにしてお母さん方にランチルームへ移動してもらいました。

そこでお母さんたちに聞いたら、子どもたちを誰にも見てももらえない人はいなかったんで

す。「だったら、今すぐは無理でも子ども同士で遊ぶようになったら、お母さんたちも疲れているだろうし、この部屋で休んでもらえませんか。そしてお母さん同士で話をしたり、一人になって休んだりすればいいと思いますよ。コーヒーなども用意しましょう」と話したんです。

翌日の1月24日から卒園式前日の3月27日まで、親子登園をやっていました。これはよかったなと思いました。一人でスマホを触ってのんびりしているお母さんもあり、お母さん同士で話をしていたり……。だから、慌てる必要はないなと思って。みんなが被災者。事業所も被災しているし、お母さんたちも被災者、みんながそんなに慌てなくてもいいのかな、と。

3月になると、2次避難していた人が帰ってきて、久しぶりに会ったお母さん同士で盛り上がっていたりする姿がありました。子どもたちも久しぶりに2次避難所から帰ってくると、表情がもう全然違うんですね。

冬から春に向けて、日もだんだん暖かくなっていく。日照時間も長くなっていく。どん底は1月1日かもしれないけれど、いい方向にしかこれからは向かっていかない。人はいないけれど、みんなだんだん増えてくる。そのうち子どもよりも大人が多いんじゃないというぐらい職員がいたりとか。そんな感じで、まったく悲観的にもならなかったし、「いいことしかないよ」としか思えませんでした。本当にね。

——園長先生のお人柄を見て、皆さんが安心されたのではないかなと思います。

日吉 ●とにかく避難所運営も保育（被災ケアも含む）も楽しくやれたかったです。悲観的にならないようにね。避難所は行政に言われて始めたわけでもないから、ずっと自分の思うように運営できました。最初、1月2日に来た方は「園長先生、私たちはいつまでいられるんですか」と言うから、「いたいだけいいよ。家が潰れている人がいたら、家が再建するまで、半年でも1年でもいいよ」と伝えました。子どもたちに声をかけると、不安な顔から嬉しい顔になったり。避難所には他園の園児もいたけれど、まったく気にしなかったですね。

——最後に全国の保育者に向けて、メッセージをいただけますか。

日吉 ●それぞれの地域、私たちのように過疎の地域もあれば、大都市での被災もあって、どこで起こるかかわからないですけど、その時々、その状況に応じた対応ができるようになったらと思うんですね。それは災害用品の備蓄や災害時の知識であったり。さらに災害時には、私たちの保育の営みは非常に有効であるということを実体験しました。

そのためには、日々の保育を適切に行っていかなければならないと思います。誰もが避難所をやれとか、園長が責任を持って運営しろということになる、園長になる人間が誰もいなく

なると思うし、そうではないけれど、何らかの形で関われるようにしていくことが大事なのかな、と思います。

それが私たちの場合は避難所開設でした。正直、やはり最初の1週間は辛かったですね。一人で炊き出しをしていた妻を、なんてことに巻き込んでしまったのかな、と思ったりしたけれど、でもそのうちみんなが喜んでくれれば、それが私たちの励みにもなったし、人に褒められれば、より良くしようと思ったとかもしました。そんな感じでしょかね。

——ありがとうございました。本日は本当に貴重な時間をありがとうございました。

日吉 ●何事も楽しまないと、ですね。ありがとうございました。

次回は、石川県輪島市の「和光幼稚園」のお話をお届けします。



平和こども園園長・日吉輝幸先生

令和6年 能登半島地震 震災後の現状と これから③

奇跡的な生存と 保育者が見た震災 和光幼稚園



全私保連広報部
岩渕善道

連載の最終回は、輪島市の幼保連携型認定こども園和光幼稚園理事長・園長の藤山孝史先生、同園主幹保育教諭の九内雅美先生、同園保育教諭の高明美先生にお話を伺いました。

自主避難所設営の経緯

——本日はお忙しい中ありがとうございます。まず初めに、藤山園長先生から、輪島市内のほとんどの園が避難所になったとお聞きました。先生の園でも避難所を開かれましたが、これは行政からの依頼だったのでしょうか。

藤山 ● いえ、自主避難所です。この近くには小中学校や公民館、自衛隊といった公設の避難所があるのですが、ビニールハウスの中に避難所を設置して、板などを置いて暖をとっている方もいらしたかったので、本当に大変だったんです。私も自衛隊のところに行く前に小学校にも寄ったのですが、1月1日は誰もいなかったんです。管理者が誰もいない状況で、真っ暗でここに入っていくのかわからない状態でした。

——ここも学校が始まったら出ていかないといけないだろうな、などと避難しながら考えていたのですが、園舎は電気がついていました。町の様子を見ると、子どもたちも散り散りになっているし、暫くは開園もできないだろうと想像できました。園は暖もとれるし、広いスペースもあるし、備蓄の寝袋もある。一方、避難所では

足も伸ばして寝られないという状況を見てましたので、悩むこともなく、「よければこちらにどうぞ」とお声をかけたのです。

——食事はどうしていましたか？

藤山 ● 最初の頃はカップ麺でしたね。だんだん物資が入ってきたりお店が開くようになって、調理をして食べられるようになりました。食べる時は2部屋、3部屋合わせて広いエリアの中で、みんなの顔を見ながら、わいわい食べていて、小さな子どもや小学生の声も聞こえたり、いろんな声が聞こえていたので、寂しいという思いもなくて、よかったかなと思っています。

——備蓄で気をつけることはありますか？

藤山 ● 行政などから示されているものをきちんと備えていれば、問題はないかなと思います。ただ、今回は子どもたちが在園していない状況なのでよかったのですが、全園児が帰宅できない状況だったら、3日分だと少し厳しいかなと思います。ご自身の地域の地形などを冷静に確認していただいて、復旧までにどれくらいの備蓄量が必要なのかを考えるといいと思います。

——必要な量を単独の園で用意するのが難しいければ、複数園で融通することも大事かと。あと、可能ならば、井戸を掘ることもですね。夏であれば子どもたちをその井戸水で遊ばせるとか、冬場は雪が降るのであれば、その井戸水で融雪をするとか、使い道を考えて井戸を掘ることはいいかなとつくづく思いました。

——ありがとうございます。この教訓を皆様にお伝えしたいと思います。避難所はいつまで開設することを予想していましたか？

藤山●楽観的に1か月くらいと思っていました。1週間くらいで物資も回ってくるだろうなと思ったし、2、3週間くらいである程度片づいて、1か月くらいで何とかなると思っていました。実際は全然でした。今も園で私が生活していますので、登録的には自主避難所となっています。

保育再開の経緯

藤山●市の動きとしては、1月末～2月中頃に民間の施設を借りて、輪島市にいる子どもたちを全員集めて保育を再開することになり、市の職員で保育を始めたのが最初です。そこから人数も多くなってきたし、避難所の運営などいろいろなところに人手がかかっているのです。自園も3月11日から保育を再開しました。卒園式も入園式も何とかできてほっとしています。

園舎隣の崩落した家屋の解体は、3月1日から始まると連絡がありました。倒壊して園舎によりかかり、外壁を壊して屋根が窓を突き破っていたために、園児の安全が確保できず園の再開まで時間がかかりました。ただ、発災から2か月が経過し、その後の余震でも大きく崩れることがなかったので、危険な場所に子どもも保

護者も入らないように配慮をしての再開となりました。しかし、輪島はずっと断水が続き、市外に出てほしいというアナウンスがあったので、再開してもすぐに帰ってこられる職員ばかりではなく、また家が崩れた職員や、市内の小学校の仮校舎が2学期から通学できるなど、職員それぞれの事情があり、全員揃っての保育はまだできていません。

奇跡的な生存

——園舎の横にある先生のご自宅が全壊していたのを拝見しました。先生ご自身は、どのように避難されたのでしょうか。

藤山●発災当初、震度5強の地震があり、自宅の隣にある本堂を見に行ったら無事だったのでほっとしていたところに大きな揺れがきて、倒れないようにお飾りを掴みました。でも、どんな揺れが大きくなって、これは無理と離して逃げようと思い、何度も転びながら外に出ようとなりました。すると今度は本堂の両脇が崩壊して、土煙が上がりました。まったく見えなくなったので、動いたら逆に危険だと判断して、近くにあった柱に掴まって揺れが収まるのを待ちました。揺れが収まって後ろを振り向いたら、屋根はなくなっていました。天井はまだ残っていて、それにいろんなものが全部載っていて、奇跡的に私が歩くスペースはきれいに空いていたので、



そこから歩いて外に出てきました。

家族は、自宅の玄関はぐちゃぐちゃでしたが裸足のまま出てきていて、無事でした。地震発生の時、家族は全員、たまたま、屋根が崩壊しなかった場所にいました。息子はテーブルの下に入って無事でした。妻と娘は揺れた時、隣の部屋のテーブルの下に行こうとしたら屋根が崩落して、もし素早く動いていたら下敷きになっていたかもしれません。

——先生ご自身やご家族が奇跡的に無事だったのですね。言葉がありません。そして、ご自宅と比べて園舎はほとんど無傷ですね。

藤山●この地震で思いましたけれど、この地域で大丈夫な家屋は、やはり築年が新しいんですよ。耐震基準は理に適っていると思いました。

マリントウンという埋立地があるのですが、液状化もしていないし、ほぼ無傷です。家が全部新しいんですよ。道路を挟んで前からある町並みは崩れているのに対象的です。ちょうど自園も、新耐震基準に満たない園舎を3年前に建て替えたばかりだったので、天井もまったく外れず、崩れずに済み、避難所にもなりました。以前の園舎だったらどんなになっていたかと思うと、ちょっと怖いところがありますね。耐震は本当に大切だなと思いました。



全壊したお寺の本堂（左）と3年前に建て替えた和光幼稚園の園舎（右）

現在の状況について

藤山●現在、園児たちは、幸い地震の影響がないと言ってもよいと思います。それは本当によかったと思っています。園を再開するのが遅れた分だけ保護者の方と一緒にいて、安定した生活を送れたおかげもあるかもしれません。

ただ、本当に輪島市から子どもがいなくなりました。特に0歳児は、お風呂や洗濯も大変なので、市外へ出ていくのは仕方ないと思っています。復旧については、解体も修理も市内の業者は手いっぱい、例えば水道工事も100件待ちなどの状況です。だから、「輪島に帰ってきてください」と言える状況になっていないし、職員の中にも金沢市から通っていて、平日はこちらに泊まって週末帰るという方もいて、状況は厳しいですが、子どもたちがまた戻ってこられるような輪島になってほしいというのが今の思いです。

——ぜひ、輪島の自慢を教えてください。

藤山●輪島は観光と漆器の町でしたので、いろんな方をおもてなししているのもあって、皆さんとても優しいです。地震で海が隆起してしまい、今は漁業が大変なんですけど、お魚もおいしいですし、山もあり、野菜もお米もおいしく、食べものすべてがおいしいです。観光地も千枚田などがありますので、また皆さんに来てもら

えるようになればいいと思います。

全国の保育者へのメッセージ

——本当に素敵な町ですね。早く復興が進むといいですね。それでは、全国の保育者の方へメッセージをいただけますか。

藤山●本当にいろいろな方々から物資や激励のお言葉をいただき、お世話になってありがたいと思っています。私どもは、この輪島という地域に残って頑張って保育をして、子どもたちを安心安全な環境の中で育てていきたいなと思います。またこの地震を踏まえて、次に何か災害が発生した時にはどうするかをしっかりと考えて、保育をしていきたいと思っています。どうぞ皆様方も、何が起るかわからない中でしっかりと備えて、保育をしていただければと思います。

私たちは、子どもたちの元気な顔を見て救われるところがあります。全国の保育者の方も、子どもたちに寄り添いながら保育をしてもらえれば、子どもたちも安全にすくすくと育ち、大きくなくていくでしょうし、保育者の心も満たされていくと思います。ぜひ、そのようにしていただければありがたいと思います。

保育者から見た震災と保育

——ありがとうございました。それでは、続いて



園舎に寄りかかる隣家

保育教諭の方にもお話をお聞きたいと思います。
高明美先生、先生ご自身のことをお聞かせいただけますか。

高●1月1日、1回目に揺れた時は、いつもの珠洲沖での地震かなと思い、ちょっと軽く見ていたのですが、2回目に揺れた時に、これはいつもの地震とは違うと感じました。いつものミシミシという音とは違う感じで、揺れながらだんだん家が崩れていくんです。このままだら下敷きになると思って、娘に「早く外に出るよ」と言っただけですけど、揺れすぎて動けないのでハイハイで出ました。よく覚えてないのですが、白い木の箱があって、いろんなところが崩れている中でそこだけは狭いながらも抜け出せました。その後は、津波が来ると思って高台に逃げました。その日は自衛隊のところで過ごし

て、それから体育館に移動しました。ただ中は寒くて眠れなかったです。

5日くらい経って、家族を頼って金沢に行きました。それからぼーっと金沢にいました。何をすればいいのかもわからなくて。3月初旬になって、園から「お掃除とか来れる？」と連絡があったので、園に帰ってきました。

——園が再開して、高先生から見て子どもたちの様子はいかがでしたか。

高●私から見ると、普段とは変わらない子もいたけれど、お家が壊れたという子もいました。震災後に初めて会った時に、保護者の方は必ず「先生よかった」とハグし合い、元気な顔を見られてすごくよかったと思いました。それから、子どもたちには普段と変わらない接し方をしていきます。愛情いっぱい、ここで楽しく安全に過ごしていければいいなと思っています。

——ありがとうございます。では、全国の保育者の皆さんへメッセージをいただけますか。

高●いつどこで、地震など災害が起こるかわかりません。何かあった時には落ち着いて行動できるように、避難訓練は大事だと思います。

——ありがとうございます。続きまして、九内雅美先生、震災から園が再開されるまでどうされていたか教えてくださいませんか。

九内●当日は自宅にいました。最初の地震で、私は癖ですぐ外に出たので、次の地震の時は外にいました。園は川を挟んで5分の距離なので、

園の方が安全だと思い徒歩で向かいました。後からわかったんですが、3本ある橋のうち残りの2本は盛り上がりすぎて渡れなかったそうです。

そこで園長と会ったのですが、鍵を家に忘れてきて園の中に入れなかったんです。ガラスを割って入ろうとも思いましたが、弟から電話があつて「津波が来るかもしれないから、高台に逃げよう」ということで、皆で自衛隊のところに逃げました。そこからは海も見えるし、私の家がある朝市通りも遠目に見えるんです。夜そこで火災が発生するのを見ていました。真っ暗な中、深夜1時くらいまで。自分で判断して、山を降りてからは園で生活をしていました。

——どんな思いで園を再開し、どんな思いで過ごされていたか。

九内●どうしても輪島の復興のために仕事をしないといけないお父さんやお母さんがいるのはわかっていたし、園は津波さえ来なければ安全。3年前に建て替えたばかりで耐震もしっかりしているし、建物自体は大丈夫だろうと思っていました。でも、水道が復旧しないと、横と後ろの家屋が倒壊していて園舎に負担がかかっているのが心配でした。あの大きな地震を一回体感すると、余震がずっと続く中でちょっとした音や揺れでも、大人でも怖いんです。

子どもたちを預かりたいと思う反面、次に大きい地震が起きた時に、責任を持ってみんな連れて逃げられるかという心配がありました。預

かる側にも不安があり、保護者という方が間違いないのではと思っていたのもあって、当分再開は難しいのではと思っていました。

ただ、市内で最初に私立の保育園を公立で運営する方法で再開して、自園の子どもも預かってもらっていたので、その子たちだけでもなんとか保育できればと思いました。でも、この園は自主避難所として登録されているので、支援物資が結構届き、毎日その受け入れだけでも大変でした。SNSで、「園に行くと物資がもらえる」と連絡を回してもらうと、水などを取りにくる方も結構いて、それが仕事でした。

——子どもたちの様子と、またお預かりする時に心がけていたことを教えてください。

九内 ●市内では和光幼稚園が一番最後に再開したので、状況が落ち着いていて、子どもたちはそんなに変化はなかったと私は思いました。ただ家族で金沢へ避難して、4月登園してきた子の中には、少し乱暴になったとか、なかなか寝られない、泣き出すと止まらないという姿があったと保護者からお聞きしました。

もう大きな余震は落ち着いたと思いますが、何かあった時に危機管理という意味でも、保護者の方とより積極的にコミュニケーションをとろうと心がけています。忙しい時は別ですが、時間がある時には話しやすいように、会話をすることは心がけています。子どもたちもですけど、保護者が不安だと伝染するので。

——九内先生から、保育者の皆様に向けて、ぜひメッセージをお願いします。

九内 ●うちの園もそうですし、能登の園の先生方はみんな被災者でもあります。子どもたちのために頑張っています。だんだんメディアが発信することも少なくなっていますが、復興は長期になると思います。保育に携わる者として頑張っていきますので、応援をお願いします。

輪島には1200年続く朝市があります。この市場一帯が震災で全焼し、その付近も倒壊した建物が多く残されているために、進まない復興の象徴という観点からの報道がなされています。しかし他方で、震災からほどなくして輪島朝市からは「必ず復興させます」という宣言がなされ、7月10日、ついに復活しました。

今回、能登に来て、この朝市の復活、そして能登全体の復興への道程を下支えする保育の力の大きさを感じました。ご自身が奇跡とも言える生存の経験をされながらも子どもたちや家族を守ろうとする思いと、オール石川を窓口に能登に思いを寄せる全国の保育者の姿がありました。

お話しいただいた皆様に改めて深く感謝申し上げます。ありがとうございました。



同園主幹保育教諭・九内雅美先生



同園保育教諭・高 明美先生



和光幼稚園園長・藤山壺史先生